

様式第7号ア（認定を受けようとする課程を有する大学・学科等における教員養成の目標等に関する書類）

（1）大学・学科の設置理念

①大学

本学の建学の精神とその実践は以下の通りである。

<建学の精神>

- ・本学では、未来につながる課題を自ら設定し、それを解決することができる先端人材を輩出します。
- ・本学では、これからの社会が目指すべき姿を構想し、その実現に向けた諸課題の解決につながる先端学術研究を実践します。
- ・本学は、人材輩出・研究の実践を通じ、現在と未来の世界に先頭を切って貢献していきます。

<建学の精神の実践>

- ・未来社会を支える人材は、多様な価値観の存在する世界で活躍します。
- ・本学は、未来社会の姿を見通し、起こり得る新たな課題を洞観し、現在の諸課題と併せて世界に率先して解決する教育・研究活動を実践します。
- ・世界で通用する先進性・多様性・倫理観と、専門的知識・創造的思考力・洞察力・俯瞰力・幅広い教養を兼ね備えて、複雑で複合的な問題に挑戦できる人材を育てます。

②学科等（認定を受けようとする学科等のみ）

(ア)人文学部心理学科

人文学部は、本学の建学の精神に則り、「未来につながる課題を自ら設定し、それを解決することができる先端人材」の育成を目標としている。心理学科は、社会で生きる人間・心を理解することを目的に、2015年に京都府亀岡市の亀岡キャンパスでスタートした。2019年より、京都太秦キャンパスに移転、2025年からは臨床心理学、心理学、社会・産業の3プログラム体制で、その学びを推進していく。3プログラムの概要は以下の通りである。

- ・臨床心理学プログラム：社会で生きる人間に関わる心理職としての臨床実践を見据えたカリキュラムになっている。大学院「臨床心理学コース」においては、臨床心理士・公認心理師の2資格の取得を目指す。
- ・心理学プログラム：社会で生きる人間の心理行動を理解するためのデータサイエンスを身につける。実験や調査を通じた心理行動の定量的データの取得、心理統計学に基づいた分析、心理メカニズムの考察能力を習得し、ひいては実社会における社会課題の解決に資する。技能の証明として認定心理士の資格を取得できる。
- ・社会・産業プログラム：社会学・コミュニケーション学により心理現象への理解を深め、地域や産業界に接続する学びを通じて実社会に役立つ実践力を身につける。社会現象の分析や事業・政策実施の基礎となる社会調査のスキルを身につけ、「社会調査士」資格を取得する。

以上の3プログラムの学びを通じて、人間を心理と社会の両面から学び、多彩な進路に活かすことのできる人材を育成することを目指している。

(イ)人文学部歴史文化学科

人文学部は、本学の建学の精神に則り、「未来につながる課題を自ら設定し、それを解決することができる先端人材」の育成を目標としている。歴史文化学科は、2015年度に京都市右京区の京都太秦キャンパスでスタートした。伝統と文化の街である京都で学びたいという学生の希望に応えながら、歴史学、民俗学、文学、観光学、デジタル人文学といった学問分野に関する教育と研究を進めている。「社会とかかわる／つながる歴史文化学科」を目指して、社会学やメディア学の専門の教員とも協働しながら、社会調査の方法なども学び、各分野の学びを学問の世界に閉じ込めることなく、社会に還元していくことも強く意識したカリキュラムを設計している。

社会的な事象を検討することを通じて、多様な文化の中で生活していた、あるいは生活している人間と、その人間たちが構成する社会の在り方についての見方・考え方を深めることになる。具体的には、社会的な事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、現代の倫理的な諸課題を探究したりする際にも、人間や社会の変遷を史料の読解から位置づける思考方法が有効であり、本学科での学びを通じて、様々な伝統や文化、宗教に関する知見を得て、その理解を深めることが可能になる。社会的な事象は、当然、それぞれの時代の国内外の政治、経済とも深く関連しており、社会を総合的に捉える能力を涵養することが肝要となる。

本学科での学びを通じて、歴史文化に関する広範な知識と教養を持ちながら、社会と関わり、繋がることのできる人材を育成することを目指している。

(ウ) バイオ環境学部応用生命科学科 (2025年4月より設置予定)

バイオ環境学部は本学の建学の精神に則り、環境問題や資源・エネルギー問題の本質的な解決を図るため、バイオサイエンス分野の先端研究の成果や技術を生かし、国際連携や地域との協力のなかで「人とともに多様な生き物が共生できる環境（バイオ環境という）」を実現することができる人材の育成を目標としている。

応用生命科学科は、旧バイオサイエンス学科の教員と食農学科の一部教員を統合することで、2025年4月からの設置を予定している。

応用生命科学科では、応用生命科学の知識や技術に基づき、人類や地球の直面する課題に対し科学的に対処できる幅広い視野および判断力を備えた「グリーンバイオ技術者・研究者」を養成する。具体的には、微生物、昆虫、植物、動物等の分子・遺伝子・細胞レベルから、食品加工、発酵・醸造並びに食品の機能性および安全性に至る広範な応用生命科学領域において、幅広い知識や技術を講義・演習・実験等を通じて教授することで、環境と人々の健康に貢献できる技術者、研究者を養成する。

学生の指導においては、応用生命科学の諸分野からなる多様な科目を配置することにより、環境と調和したグリーンバイオ技術力を備え、並びに多角的な視点・洞察力・柔軟な思考を身に付け、的確な判断を下せる力および真理を探究する人材を養成する。また、専攻演習や卒業研究を通じて問題解決に導く力を養うとともに、人々の生活の向上と人間社会の発展に貢献しようとする姿勢も育む。

将来の進路としては、大学院進学、公務員、中学校・高等学校教員（理科）、食品産業、医薬品産業、化学産業、香粧品産業、外食産業、食品販売業に寄与する人材となることが期待される。また、食品産業での起業などを目指すことも考え得る。多角的かつグローバルな視点・洞察力・柔軟な思考を身に付けることによって、グローバル企業、地域産業などいずれにおいても貢献できるであろう。

(エ) バイオ環境学部生物環境科学科 (2025年4月より設置予定)

バイオ環境学部は本学の建学の精神に則り、環境問題や資源・エネルギー問題の本質的な解決を図るため、バイオサイエンス分野の先端研究の成果や技術を生かし、国際連携や地域との協力のなかで「人とともに多様な生き物が共生できる環境（バイオ環境という）」を実現することができる人材の育成を目標としている。

生物環境科学科は、旧バイオ環境デザイン学科の教員と食農学科の一部教員を統合することで、2025年4月からの設置を予定している。

生物環境科学科では、生物環境科学の知識や技術に基づき、人類や地球の直面する課題に対し科学的に対処できる幅広い視野および判断力を備えた「生物環境科学技術者・研究者」を養成する。具体的には、生態学的知識、環境分析技術、環境再生、農産物の栽培・育種技術などを講義・実験・フィールド実習等を通じて幅広く教授することで、人と自然の共生に貢献できる環境専門家や農業技術者、研究者を養成する。

学生の指導においては、生物環境科学の諸分野からなる多様な科目を配置することにより、森林環境・水環境・地域環境等の共生空間における生物多様性や物質循環に関する科学・技術力、および環境に配慮しつつ地域の特徴を生かした農産物の生産技術力を備え、並びに多角的な視点・洞察力・柔軟な思考を身に付け、的確な判断を下せる力および真理を探究する人材を養成する。また、専攻演習や卒業研究を通じて問題解決に導く力を養うとともに、人々の生活の向上と人間社会の発展に貢献しようとする姿勢も育む。

将来の進路としては、大学院進学、環境関連産業、公務員、高等学校教員（理科、農業）、中学校教員（理科）、建設業、食品産業、農業経営者、農業法人、外食産業、食品貿易業などに寄与する人材となることが期待される。多角的な視点・洞察力・柔軟な思考を身に付けることによって、環境関連企業や地域の農産業などにおいても貢献できるであろう。

(2) 教員養成の目標・計画

①大学

本学は、前身の京都学園大学の開学当初より教職課程を設け、中等教育の教員養成に関わってきた。科学的な知識の豊かな蓄積と、若い世代の全人格の成長を支援できる人間的な成熟度、この両者を要件とする学校教員の要請は、人材育成という大学の社会貢献の有意義不可欠の部分である。本学はそうした自覚のもとに、これまで多くの中高教員（中高理科、高校農業など）を社会に送り出してきた。

本学の教職課程が特に留意するところは、知的な専門性と指導力に富み、地域に根ざした教育環境の向上に寄与する教員の養成である。そのために学生に対する徹底した実践的指導と厳正な成績評価に注力している。教育実習以前の段階で履修者が精選され、教育者としての適性に富んだ学生のみに参加が限られていくことが、本学のプログラム運営の特徴である。履修者には深く広い専門知識、そして青少年の心身の発達に即した濃やかな指導性の獲得を、達成目標として要請している。

上記の目標に近づくための重要な通過点として設けられている必修科目は、教育実習の前年3年次に学生が50分の模擬授業を複数回試みる「教育実習事前指導Ⅰ・Ⅱ」(計2単位)である。こうしたカリキュラムの工夫に加え、現場への視野の深化と生徒理解の伸長を期して、キャンパス付近の小・中学校でのボランティア活動など、地元との交流に積極的に学生を送り出している。専任教員が常駐する教職課程指導室は、学業面や進路相談の場、あるいは社会への参加窓口として、課程を履修する学生が不断に集まるスポットの機能を果たしている。

取得可能な免許教科は社会、地理歴史、理科、農業、保健体育の5つであった。それを2025年度に向けては、新たに人文学部心理学科を教職課程に加え、免許科目としても公民を増やし、5学科で6つの免許教科が取得できるよう計画を進めている。そして、こうした本学の教員養成への取り組みを支える組織として、教務センター長、教職課程専任教員、教職課程を有する学部の教務主事などをメンバーとする大学教職課程部会で、必要な諸科目の設定、専任教員の配置、教育実習・介護等体験の円滑な実施計画など、課程運営全般の事情を協議する態勢を整えている。

②学科等（認定を受けようとする学科等のみ）

(ア)人文学部心理学科

人間の心理や行動を知るために心理学を基礎から学び、また、人間が抱える心の問題の解決に資する臨床心理学を具体的に学ぶことをとおして、自分自身や他者の心の構造を理解しつつ、各自の生活や志した職域において適切な社会的役割を果たしていける人材を育成することを目指す本学科の教育目標は、本学科が養成しようとする教員の人物像そのものである。2015年に人文学部心理学科として設置した際から、本学科の具体的な進路の一つとして、教育関係職が想定されていた。2022年度からの高等学校学習指導要領の改訂に伴い、公民科「倫理」において、「青年期の課題を踏まえ、人格、感情、認知、発達についての心理学の考え方についても触れること」になったことも考慮すれば、今回、心理学科においても、高等学校一種免許（公民）課程を設置するのは、適切なタイミングといえる。本学科で、対人援助、応用心理のみならず、社会学の基礎を学び、社会の仕組みや人の心を理解し、地域や企業のさまざまな課題に向き合いながら、自分の働き方を考えてきた学生は、中等教育の教員として、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される、人間としての在り方生き方についての自覚を促すのに最適な人材とみなしうる。

このような人材を育成するために本学科では、1・2年次に心理学・社会学の見方を養い、方法を学んでいく。具体的には「心理学概論」「臨床心理学概論」「社会・産業基礎」などの科目を通じて心理学・社会学の全体像をつかんでいく。教職では「教職入門」「教育原論」「教育制度論」などの科目で教職の全体像をつかんでいくので、教育には様々な問題があり、その多くに人の心や社会の仕組みが関わっていることなどをつかむことができるようにしている。そして、「心理学実験」「臨床心理学基礎演習」「社会・産業基礎演習」などの科目を通じて、心理学・社会学のより具体的な内容や方法を学んでいく。教職では「生徒・進路指導論」「教育課程論」「社会科・公民科教育法」などの科目でより具体的な内容や方法を学んでいくので、人の心や社会の仕組みを解き明かす方法を生活指導や学習指導でどのように活用すればいいのかを考えることができるようにしている。3・4年次には心理学・社会学を実践していく。具体的には「心理学専門演習」「臨床心理学専門演習」「社会・産業専門演習」などの科目で心理学・社会学を実践していく。教職では「教育実習事前指導」「教育実習」などの科目で実践していくので、社会学・心理学での実践で得た実践知を即座に教職での実践に応用することができる。このように心理学・社会学と教職の全体像をつかむ時期と具体的な内容や方法を学ぶ時期、実践をする時期を同じにすることで、学生自らが心理学・社会学を中等教育の教員としてどのように活用することができるのかを考えることができるようにしている。

(イ)人文学部歴史文化学科

(1)の②(イ)で触れた、本学科の「未来につながる課題を自ら設定し、それを解決することができる先端人材」を育成するという理念は、そのまま本学科が養成する教員の人物像に重なっている。世界を視野に入れつつ日本の歴史や文化を主軸に学習と研究を進め、史料の収集・読解能力と合理的な思考方法を習得するとともに、フィールドワークも重視し、京都をはじめとした多様な地域の文化についても学びを深めようという本学科の教育目標は、学習指導要領が求めるような、「社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させる」公民科教員の務めとつながるものである。学科における学修において様々な資料・史料から必要な情報を読み取り、社会的な事象の意味、意義を解釈し、さらに事象の特色や事象間の関連を説明する力、端的に言えば社会を観察し分析する力が養われる。本学科で学んだ者がそうした学修の成果を生かし、今度は中等教育の教員として若い人材ー地域に根ざしつつグローバルな視点を持ち、世界や日本の歴史、文化、地理的背景から現代の社会的事象にまで深い理解をもったーの育成に努めるならば、本学科のこの上ない社会貢献となるであろう。

このような人材を育成するために本学科では、1・2年次に歴史文化の基礎を学び、地域を探究し、その成果を発信していく。具体的には「歴史文化学概論」「質的社会調査論」「フィールドワーク演習」などの科目を通じて歴史文化の基礎を学び、地域を探究し、その成果を発信していく。教職では「教育原論」「教育制度論」「教育の方法及び技術（ICT活用の理論と実践を含む）」「社会科・公民科教育法」などの科目で教職の基礎を学んだり授業の方法を考えたりしていくので、教育にも学校がある地域の社会状況（文化や歴史）が深く関わっていることに気づいたり、教材研究や地図・統計などの資料を授業で効果的に活用する方法を探究活動や発信の経験を活かして考えたりすることができるようにしている。3・4年次には自分の興味を深掘りし、これまでの学びを卒業論文にまとめていく。具体的には「日本思想史」「神話学」「歴史文化学特別講義（妖怪文化・王朝文化・サブカルチャー・民俗文化財）」「専門ゼミ」などの科目で自分の興味を深掘りし、これまでの学びを卒業論文にまとめていく。教職では「教育実習事前指導」「教育実習」などの科目で教材研究をして授業を実践していくときに、学科の科目で深掘りした人間や社会の在り方についての知識や多様な見方・考え方を活用することができるようにしている。さらに、卒業論文にまとめる作業は学習指導案を作成する作業をするときに応用することができるようにしている。

（ウ）バイオ環境学部応用生命科学科

応用生命科学科の「人類や地球の直面する課題に対し科学的に対処できる幅広い視野および判断力を備えた『グリーンバイオ技術者・研究者』を養成する」という理念は、そのまま本学科が養成する教員の人物像に重なっている。環境と調和したグリーンバイオ技術力を備え、並びに多角的な視点・洞察力・柔軟な思考を身に付け、的確な判断を下せる力および真理を探究する人材を養成する。そのために分子、細胞レベルの生命科学、食品の開発・製造、環境、健康分野に関する実学的教育を通じて、グローバル化社会において自らの力で生き抜き、社会に貢献し続ける社会人の育成を目的とする。

このような人材を育成するために本学科では1年次に「化学」「生物学」「物理学」「地球科学」など化学、生物学、物理学、地学の基礎的な専門知識を修得するとともにそれらに関連する基礎的な実験「化学実験」「生物学実験」「物理学実験」「地球科学実験」を履修する。学年の進行とともに化学、生物学、生命科学の専門基礎科目、専門科目や生命科学分野で必要となる専門実験を段階的に履修する。具体的には「有機化学」「生物有機化学」「細胞生物学」「応用微生物学」「植物生理学」「分子生物学」などで多角的に真理を探究する力を育成し、「有機化学実験」「植物バイオ実験」「分子生物学実験」「栄養科学実験」「応用微生物学実験」などの実験科目を通じて、コミュニケーション力、協働力、課題発見力やリーダーシップを育む学修を行う。4年次では、1年次から3年次までに学んだ知識と技術を基にして、卒業研究と専攻演習を行い、応用生命科学領域の発展に積極的に関与できる力を育む学修を行う。これらにより化学、生物学、物理学、地学の基礎知識を基盤とした思考力、表現力、批判力、そして生命科学に関わる社会の諸問題の解決に貢献しうる理科教員の養成に取り組む。

（エ）バイオ環境学部生物環境科学科

生物環境科学科の「人類や地球の直面する課題に対し科学的に対処できる幅広い視野および判断力を備えた『生物環境科学技術者・研究者』を養成する」という理念は、そのまま本学科が養成する教員の人物像に重なっている。森林環境・水環境・地域環境等の共生空間における生物多様性や物質循環に関する科学・技術力、および環境に配慮しつつ地域の特徴を生かした農産物の生産技術力を備え、並びに多角的な視点・洞察力・柔軟な思考を身に付け、的確な判断を下せる力および真理を探究する人材を養成する。そのために生態学的知識、環境分析技術などの基礎生物学、環境再生、農産物の栽培・育種技術に関する実学的教育を通じて、グローバル化社会において自らの力で生き抜き、社会に貢献し続ける社会人の育成を目的とする。

このような人材を育成するために本学科では1、2年次に「化学」「生物学」「物理学」「地球科学」など化学、生物学、物理学、地学の基礎的な専門知識を修得するとともにそれらに関連する基礎的な実験「化学実験」「生物学実験」「物理学実験」「地球科学実験」を履修する。また「作物栽培実習」を必修科目として履修させる。学年の進行とともに生物学、環境科学、農学、食品科学の専門基礎科目、専門科目や生物学、環境科学、農学分野で必要となる実験・実習を段階的に履修する。具体的には「環境化学」「基礎生態学」「土壌環境学」「遺伝育種学」「生物資源学」「食品化学」などで多角的に真理を探究する力を育成し、「水環境科学実験」「環境生物学実験」「景観生態学実習」「樹木学実習」「京野菜栽培加工実習」などの実験・実習科目を通じて、コミュニケーション力、協働力、課題発見力やリーダーシップを育む学修を行う。4年次では、1年次から3年次までに学んだ知識と技術を基にして、卒業研究と専攻演習を行い、生物環境科学領域の発展に積極的に関与できる力を育む学修を行う。これらにより化学、生物学、環境科学、農学の基礎知識を基盤とした思考力、表現力、批判力、そして生物環境科学に関わる社会の諸問題の解決に貢献しうる理科教員および農業教員の養成に取り組む。

(3) 認定を受けようとする課程の設置趣旨（学科等ごとに校種・免許教科別に記載）

(ア) 人文学部心理学科

<高等学校一種免許状（公民）>

本学人文学部の心理学科においては、社会で生きる人間を生活や心理面から援助する仕事に役立つ臨床心理学、人間の心の働く仕組みを科学的に探究し、情報活用・伝達能力を駆使しながら基礎力を養成する心理学という心理学分野の専門家のみならず、社会の仕組みや人間の心を理解し、地域や企業のさまざまな課題に向き合いながら、自分自身の在り方や生き方を考える社会学分野の3分野の教員による3つのプログラムを擁していることが、他大学の心理学科との違いとなる。初年次において、3分野を横断的に学び、その後、自らの選んだ分野を専門的に探究する本学科の学びは、公民科における「社会的な見方・考え方」（「公共」における「人間と社会の在り方についての見方・考え方」、「倫理」における「人間としての在り方生き方についての見方・考え方」、「政治・経済」における「社会の在り方についての見方・考え方」総称しての呼称）をまんべんなくカバーしており、高等学校公民科教員の養成が十分、可能である。以上の理由により、本学科に高等学校の公民科教員免許状の取得が可能な教職課程を置くものである。

(イ) 人文学部歴史文化学科

<高等学校一種免許状（公民）>

人文学部歴史文化学科においては、さまざまな資料を読み解く読解力を軸に、歴史・文化への深い理解力や物事を探究する力を獲得させる。そして、その力を活用して一般庶民の生活文化、妖怪や神話や祭礼などを題材に、人間の生活文化そのものを探究したり、1200年以上の歴史がある古都・京都の人々が今に受け継いでいる貴重な文化、文学や言語を学んだりしながら、地域文化の継承者などの育成を目指す多様な学びを通じて、「歴史学及び周辺分野の基礎的知識と調査研究技能を十分に体得し、それを実社会において問題解決に活用できる人材を育成する」ことを教育目標としてきた。このことは、「公共」の科目の性格に記述されている「急激な少子高齢化が進む中で成熟社会を迎えた我が国にあっては、これまで受け継がれてきた伝統や文化、地域社会などの集団的なまとまりの維持、継承とともに、複雑で変化の激しい社会の中で、様々な情報や出来事を受け止め、主体的に判断しながら、自分を社会の中でどのように位置付け、社会をどう描くかを考え、多様な人生観、世界観ないし価値観をもつ他者と共に生き、課題を解決していくための力が必要となる。」をカバーしている。

さらに、2025年度より始めるカリキュラムにおいては、「社会とかかわる／つながる歴史文化学科」をキャッチフレーズに改革を実施し、これまで心理学科に所属していた社会学を専門とする教員を歴史文化学科の兼任として、複数の授業を担当することになっている。このことによって、公民科における「社会的な見方・考え方」（「公共」における「人間と社会の在り方についての見方・考え方」、「倫理」における「人間としての在り方生き方についての見方・考え方」、「政治・経済」における「社会の在り方についての見方・考え方」総称しての呼称）をカバーすることにもなり、高等学校公民科教員の養成が十分、可能である。以上の理由により、本学科に高等学校の公民科教員免許状の取得が可能な教職課程を置くものである。

(ウ) バイオ環境学部応用生命科学科

<中学校一種免許状（理科）>

旧バイオサイエンス学科では、既に中学校一種免許状（理科）と高等学校一種免許状（理科）の教員免許が取得できる課程を設けてきた。応用生命科学科においても、その課程を踏襲し、中学一種免許（理科）においては、学習指導要領に従い、教科の目標である「自然の事物・現象に関わり、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象を科学的に探究するために必要な資質・能力を育成することを目指す」ものである。本学科では化学、生物学、生命科学に関する講義・演習・実験・実習の授業科目と、物理学と地学の基礎に関する講義や実験の授業科目を修得させる。微生物、昆虫、植物、動物等の分子・遺伝子・細胞レベルでの理解、食品加工、発酵・醸造並びに食品の機能性および安全性に関する中学理科教育のための広範かつ深い知識と理論を基礎とした理科教育が行える教員養成を行うことを目的として本課程を設置する。

<高等学校一種免許状（理科）>

高等学校一種免許状（理科）では、上記中学校一種免許状（理科）が目指す内容をさらに深く進め、高等学校の学習指導要領が目指す「異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性が増大する状況において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむ」ことを、生命科学の知識に基づいて教えることができるようにするものである。

(エ) バイオ環境学部生物環境科学科

＜中学校一種免許状（理科）＞

旧バイオ環境デザイン学科では、既に中学校一種免許状（理科）と高等学校一種免許状（理科）の教員免許が取得できる課程を設けてきた。生物環境科学科においても、その課程を踏襲し、中学校一種免許（理科）においては、学習指導要領に従い、教科の目標である「自然の事物・現象に関わり、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象を科学的に探究するために必要な資質・能力を育成することを目指す」ものである。本学科では化学、生物学、環境科学、農学、食品科学に関する講義・演習・実験・実習の授業科目と、物理学と地学の基礎に関する講義や実験の授業科目を修得させる。生態学的知識、環境分析技術、環境再生に関する中学理科教育のための広範かつ深い知識と理論を基礎とした理科教育が行える教員養成を行うことを目的として本課程を設置する。

＜高等学校一種免許状（理科）＞

高等学校一種免許状（理科）では、上記中学校一種免許状（理科）が目指す内容をさらに深く進め、高等学校の学習指導要領が目指す「異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性が増大する状況において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむ」ことを、環境科学や農学の知識に基づいて教えることができるようにするものである。

＜高等学校一種免許状（農業）＞

生物環境科学科の一部教員は、旧食農学科から異動するものであり、旧食農学科では高等学校一種免許状（農業）の教員免許が取得できる課程を設けてきた。高等学校一種免許状（農業）においては、学習指導要領に従い、教科の目標である「農業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、農業や農業関連産業を通じ、地域や社会の健全で持続的な発展を担う職業人として必要な資質・能力を育成することを目指す」ものである。本学科では化学、生物学、環境科学、農学、食品科学に関する講義・演習・実験・実習の授業科目と、物理学と地学の基礎に関する講義や実験の授業科目を修得させる。作物の栽培・育種技術、農産物の流通・加工を含む生物・地域資源活用、生態学、環境分析技術、環境再生に関する広範かつ深い知識と理論を基礎とした農学教育が行える教員養成を行うことを目的として本課程を設置する。

尚、本課程は生物環境科学科の中に設置されるが、必要な科目のいくつかは応用生命科学科所属教員によって教育される。

I. 教職課程の運営に係る全学的組織及び各学科等の組織の状況

(1) 各組織の概要

①

組織名称：	大学教務委員会
目 的：	全学的な教務関連事項(教職課程含む)について、調整を行い円滑な運営を図る。
責 任 者：	教務センター長
構成員(役職・人数)：	教務センター長(1名)、各学部教務主事(5名)、各学部の専任教員のうちから担当副学長が必要に応じて指名した者(若干名)、その他担当副学長が必要に応じて指名した者(若干名)
運営方法：	月1回、定例で開催されるほか、必要に応じて臨時に開催。

②

組織名称：	大学教職課程部会
目 的：	本学教職課程の円滑な運営を図る。
責 任 者：	教務センター長
構成員(役職・人数)：	教務センター長(1名)、教職課程担当専任教員(1名)、教職課程を設置する学部の教務主事のうちから、担当副学長が必要に応じて指名した者、その他担当副学長が必要に応じて指名した者(教務担当事務職員：次長、部長、副部長、課長等若干名)
運営方法：	必要に応じて開催。年度ごとの活動計画、教職に関する科目の授業計画、兼任講師等の採用について検討を行い、大学教務委員会に提案。

③

組織名称：	学部教務委員会
目 的：	学部独自の教務関連事項について、円滑な運営を図る。
責 任 者：	学部教務主事
構成員(役職・人数)：	学部教務主事(1名)、大学教務委員(1名)、学部教務委員(人数は学部により異なる)、学部担当教務センター教務課職員
運営方法：	学部ごとに設置。月1回、定例で開催されるほか、必要に応じて臨時に開催。大学教務委員会での検討事項を学部において共有。学部固有の教務関連事項(教職課程の教科に関する科目を含む)に関し検討を行う。教職課程全体に関わる問題については、教職課程委員会と連携を行う。

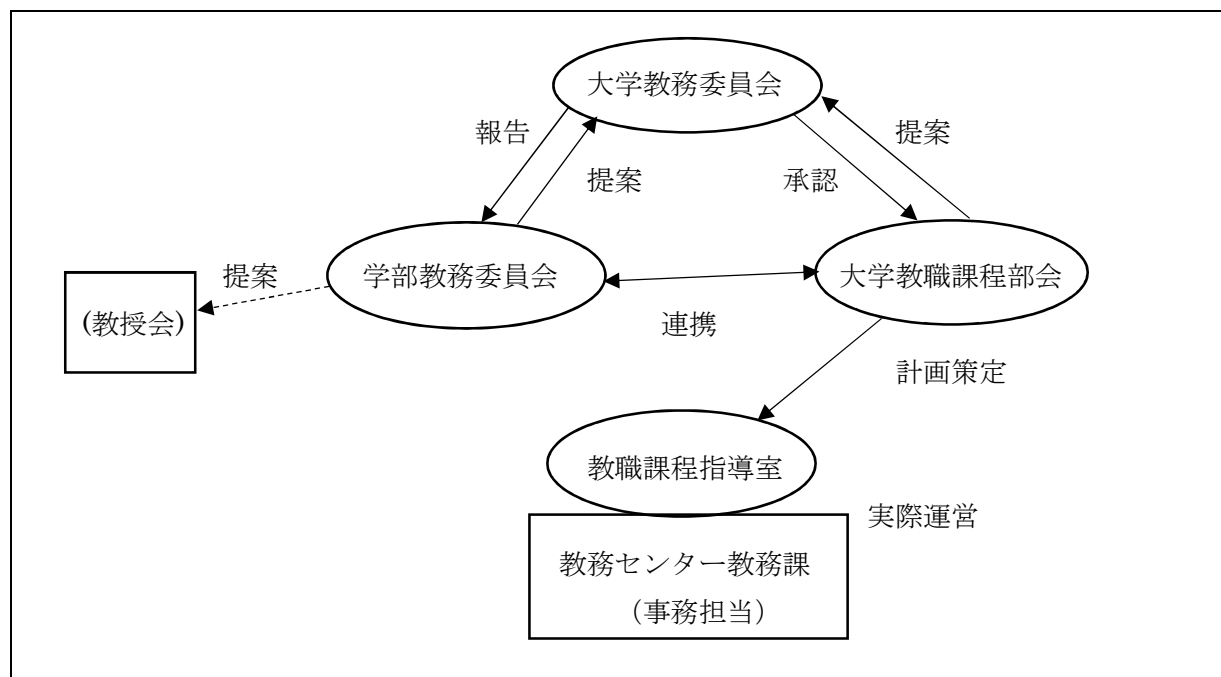
④

組織名称：	教職課程指導室
目 的：	教職関連事項について、実務的運営を担う。
責 任 者：	大学教職課程部会担当教職課程専任教員
構成員(役職・人数)：	教職課程専任教員(2名)、指導室専任教員(3名)、教職担当教務センター教務課職員(2名)
運営方法：	教職課程の実践的運営、学生の履修指導、履修相談、教育ボランティアやインターンシップの募集、教科書等の関連図書の貸し出し、介護等体験や教育実習に関する一切の連絡調

様式第7号イ

整を行う。また、これらに関する事務および免許申請等の業務については、教職担当の教務センター教務課職員が行う。

(2) (1) で記載した個々の組織の関係図



Ⅱ. 都道府県及び市区町村教育委員会、学校、地域社会等との連携、協力に関する取組

(1) 教育委員会との人事交流・学校現場の意見聴取等

教職課程指導室において、教員 OB を教職全般の指導教員として受け入れている。また、同指導室において、教育ボランティアの送り出しなどにあたって学校現場の現状や意見などを聴取しているほか、京都府を中心に、採用状況等についても情報収集を行っている。

(2) 学校現場における体験活動・ボランティア活動等

取組名称： 大学生教育ボランティア

連携先との調整方法： 京都府教育委員会の要請を本学教職課程指導室で受け、学生を募集。

具体的な内容： 放課後または学校休業日に学習支援を行っている。

Ⅲ. 教職指導の状況

全体ガイダンスとして、オリエンテーション期間中に学年ごとの教職課程説明会を開催している。1～2 年生は教職課程を履修するにあたっての心構えや免許制度全般、免許取得までの履修方法などを中心に説明を行う。3 年生では「教育実習事前指導」の内容説明や教育実習の内諾活動、介護等体験の手続きなどの説明を主に行う。4 年生では、教育実習の全体説明や履修状況の確認などが主になる。

個別指導は教職課程指導室で行う。指導室専従の教員が常駐しており、履修者に対する個別相談に応じているほか、教育ボランティアの募集活動、教員採用試験対策に関するサポートも行っている。また、同指導室では、学習指導要領、教科書、副読本などの教材が多数そろえてあり、指導案作りの大きな力となっている。

様式第 7 号ウ

<心理学科> (認定課程: 高一種免・公民)

(1) 各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	「日本国憲法」「人権の歴史と現代」「健康スポーツ理論」などの科目を学ぶことで、広い教養や視野を養う。また、「教育原論」「教職入門」の両科目において、教職についての理解を深め、教員としての適性を確認する。宗教学、社会学、心理学、発達心理学などの、高校「公民科」で扱う領域に関する基本的な知識を獲得する。
	後期	教員になるために必要な、教育制度やICT技術を活用した教育の方法及び技術などについて、より深い知識を身につけるとともに、生命倫理学などの教養や、グローバル社会に対応するため、英会話について学ぶ。哲学や臨床心理学など、高校「公民科」で扱う知識領域への理解を深める。
2 年次	前期	教職課程の基礎的な知識を一年目で学習したことをうけて、「社会科・公民科教育法Ⅰ」「道徳教育の指導法」といった科目を通じて、公民教員として必要不可欠な公民科に関する基本的な知識・指導方法について考察する力をつける。また教員として、必要な知識・技術を「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」「生徒・進路指導論」を通じて獲得する。さらに教育・学校心理学、宗教文化などに関する基本的な知識を獲得して、社会調査の方法も獲得する。
	後期	「社会科・公民科教育法Ⅱ」を通じて、公民教員として必要な指導法をさらに深く学ぶとともに、「教育課程論」「発達と学習の心理学」を通じて、高等学校教員として必要な知識・技術を身につける。さらに経済学や知覚・認知心理学に関する知見を深め、前期に引き続き社会調査の方法も獲得する。
3 年次	前期	「特別支援教育」「教育相談」を通じて、公民教員として必要な指導法を習得するとともに、「教育実習事前指導Ⅰ」において、教育実習に望むための準備を行う。心理学統計法や、社会意識、コミュニケーション社会学など、高校「公民科」で扱う分野に関する専門的な知識も獲得する。
	後期	「教育実習事前指導Ⅱ」を通じて、教育実習に望むための準備を万全にする。コミュニティ社会学や日本思想史など、高校「公民科」で扱う分野に関する専門的な知識を深化させ、質的社会調査の方法も獲得する。
4 年次	前期	実際に教育実習を経験するなかで、これまで獲得してきた公民科の教育内容や生徒指導を充実させるための方法、コミュニケーション能力を実践的なものとする。また「教育実習A」を通じて、教育実習のための最終確認をする。
	後期	「教職実践演習」を通じて、実習校での教育実習を振り返り、自らの公民教員としての知識・技能全般における長所をみいだすとともに、課題を発見する。

様式第7号ウ（教諭）

<心理学科>（認定課程：高一種免・公民）

（2）具体的な履修カリキュラム

履修年次		具体的な科目名称				
		各教科の指導法に関する科目及び教育の基礎的理解に関する科目等	教科に関する専門的事項に関する科目	大学が独自に設定する科目	施行規則第66条の6に関する科目	その他教職課程に関連のある科目
年次	時期					
1年次	前期	教育原論	日本国憲法		日本国憲法	人権の歴史と現代
		教職入門	社会学総論			
			心理学概論		情報リテラシーⅠ	
			発達心理学		健康スポーツ理論	
			宗教学		SLSⅠ	
	後期	教育制度論	哲学		情報リテラシーⅡ	生命倫理学
		教育の方法及び技術（ICT活用）の理論と実践を含む）	臨床心理学概論		英会話A	
			法学			
2年次	前期	社会科・公民科教育法Ⅰ	社会調査法Ⅰ		英会話B	
		特別活動及び総合的な学習の時間の指導法	教育・学校心理学			
		生徒・進路指導論	宗教文化			
			政治学原論			
	後期	社会科・公民科教育法Ⅱ	経済学総論			
		発達と学習の心理学	知覚・認知心理学			
		教育課程論	社会調査法Ⅱ			
3年次	前期	教育実習事前指導Ⅰ	社会意識論			
		特別支援教育	コミュニケーション社会学			
		教育相談	心理学統計法			
	後期	教育実習事前指導Ⅱ	コミュニティ社会学			
			質的社会調査法			
			日本思想史			
4年次	前期	教育実習A				
	後期	教職実践演習（中・高）				

様式第 7 号ウ

<歴史文化学科> (認定課程: 高一種免・公民)

(1) 各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	「日本国憲法」「人権の歴史と現代」「健康スポーツ理論」などの科目を学ぶことで、広い教養や視野を養う。また、「教育原論」「教職入門」の両科目において、教職についての基礎的な理解を深め、教員としての適性を確認する。民俗学や宗教学、社会学、心理学などの、高校「公民科」で扱う領域に関する基本的な知識を獲得する。
	後期	教員になるために必要な、教育制度やICT技術を活用した教育の方法及び技術などについて、より深い知識を身につけるとともに、生命倫理学などの教養や、グローバル社会に対応するため、英会話について学ぶ。また経済学や哲学など、基本的な知識を身につけ、高校「公民科」で扱う知識領域への理解を深める。
2 年次	前期	教職課程の基礎的な知識を一年目で学習したことをうけて、「社会科・公民科教育法Ⅰ」「道徳教育の指導法」といった科目を通じて、公民教員として必要不可欠な公民科に関する基本的な知識・指導方法について考察する力をつける。また教員として、必要な知識・技術を「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」「生徒・進路指導論」を通じて獲得する。また社会調査法や発達心理学などに関する基本的な知識を獲得する。
	後期	「社会科・公民科教育法Ⅱ」を通じて、公民教員として必要な指導法をさらに深く学ぶとともに、「教育課程論」「発達と学習の心理学」を通じて、高等学校教員として必要な知識・技術を身につける。さらに質的社会調査や社会調査の方法も獲得する。
3 年次	前期	「特別支援教育」「教育相談」を通じて、公民教員として必要な指導法を習得するとともに、「教育実習事前指導Ⅰ」において、教育実習に望むための準備を行う。社会知識や宗教文化など、高校「公民科」で扱う分野に関する専門的な知識も獲得する。
	後期	「教育実習事前指導Ⅱ」を通じて、教育実習に望むための準備を万全にする。コミュニティ社会学や日本思想史など、高校「公民科」で扱う分野に関する専門的な知識を深化させる。
4 年次	前期	実際に教育実習を経験するなかで、これまで獲得してきた公民の教育内容や生徒指導を充実させるための方法、コミュニケーション能力を実践的なものとする。また「教育実習A」を通じて、教育実習のための最終確認をする。
	後期	「教職実践演習」を通じて、実習校での教育実習を振り返り、自らの公民教員としての知識・技能全般における長所をみいだすとともに、課題を発見する。

様式第7号ウ（教諭）

<歴史文化学科>（認定課程：高一種免・公民）

（2）具体的な履修カリキュラム

履修年次		具体的な科目名称				
		各教科の指導法に関する科目及び教育の基礎的理解に関する科目等	教科に関する専門的事項に関する科目	大学が独自に設定する科目	施行規則第66条の6に関する科目	その他教職課程に関連のある科目
年次	時期					
1年次	前期	教育原論	日本国憲法		日本国憲法	人権の歴史と現代
		教職入門	社会学概論			
			宗教学		情報リテラシーⅠ	
			民俗学A		健康スポーツ理論	
			心理学概論		SLSⅠ	
	後期	教育制度論	経済学概論		情報リテラシーⅡ	生命倫理学
		教育の方法及び技術（ICT活用の理論と実践を含む）	哲学		英会話A	
			臨床心理学概論			
2年次	前期	社会科・公民科教育法Ⅰ	社会調査法Ⅰ		英会話B	
		特別活動及び総合的な学習の時間の指導法	発達心理学			
		生徒・進路指導論	民俗学B			
			政治学原論			
	後期	社会科・公民科教育法Ⅱ	質的社会調査論			
		発達と学習の心理学	社会調査法Ⅱ			
		教育課程論	法学			
3年次	前期	教育実習事前指導Ⅰ	社会意識論概説			
		特別支援教育	宗教文化			
		教育相談	口承文芸論			
			神話学			
			教育・学校心理学			
	後期	教育実習事前指導Ⅱ	コミュニティ社会学概論			
			日本思想史			
4年次	前期	教育実習A				
	後期	教職実践演習（中・高）				

様式第 7 号ウ

<応用生命科学科> (認定課程: 中一種免・理科)

(1) 各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	理科の基礎科目を中心に科学的な考え方ができる理科教員としての基礎を養うとともに、作物栽培実習を通じて自然の大切さを伝えることのできる素養を培う。語学や人文・社会科学の学びから広い教養を身に付ける。
	後期	化学実験、生物学実験などの実習科目を通じて科学について学ぶための実験手法を身に付けるとともに、実験結果を議論し、発表するための方法を習得する。教職の基礎科目を通じて教員としての適性を確認する。
2 年次	前期	バイオサイエンスに関連する専門科目を通じて科学的な素養を幅広く養うとともに、現代科学での諸問題に対して深く考えることのできる教員の資質を身に付ける。理科教育法についての基礎知識や授業法を習得する。
	後期	引き続きバイオサイエンスに関連する専門科目や専門実験を通じて幅広い科学知識を身に付けるとともに、科学への関心を深めるための探求的な資質、能力を身に付ける。理科教員として必要とされる専門的な指導法や中学校教員として必要となる生徒指導法を習得する。
3 年次	前期	バイオサイエンスに関連する専門実験を通じて高度な科学的問題について研究するための研究方法を身に付ける。さらに実験結果について議論し、発表するための技術を習得する。模擬授業の実践から確かな理科教育の高い指導力を身に付ける。自ら主体的に教材研究を行うとともに、それを活かした学習指導案を作成できる。
	後期	模擬授業を繰り返し行うことで中学校理科教員として必要な指導法を確実に習得するとともに、教育実習に臨むための基盤を確立する。板書や発問、的確な話し方などの基本的な授業技術を身に付けるとともに、反応を見ながら授業行うことができる。
4 年次	前期	専攻研究室に所属し卒業研究テーマを決め、実験・調査を進める。教育実習を通じてこれまで学んだ知識や技術を確認するとともに、総合的な授業の組み立てができる能力を身に付ける。また、教育実習を通じて生徒との向き合い方や、教員の仕事についての理解を深め、自らの教員としての資質を再確認する。
	後期	引き続き専攻研究室において卒業研究に取り組み、実験・調査を進めるとともに研究発表を通じて理科の専門家としてどれだけの資質が身に付いたのかを確認する。4年間を通じて中学理科教員として必要な知識や指導法が身に付いたのかを確認する。これまで培った資質を実際の教育現場でどのように活かしていくのか、自己課題を設定し、将来にわたって追求する。

様式第7号ウ（教諭）

＜応用生命科学科＞（認定課程：中一種免・理科）

(2) 具体的な履修カリキュラム

履修年次		具体的な科目名称				
		各教科の指導法に関する科目及び教育の基礎的理解に関する科目等	教科に関する専門的事項に関する科目	大学が独自に設定する科目	施行規則第66条の6に関する科目	その他教職課程に関連のある科目
年次	時期					
1年次	前期	教育原論	物理学		日本国憲法	人権の歴史と現代
		教職入門	化学		情報リテラシーⅠ	
			生物学		健康スポーツ理論	
			物理学実験		SLSⅠ	
			地球科学実験			
			地球科学			
	後期	教育制度論	生物学実験		情報リテラシーⅡ	生命倫理学
		教育の方法及び技術(ICT活用の理論と実践を含む)	化学実験		英会話A	
			有機化学			
			植物生理学			
2年次	前期	理科教育法Ⅰ	分子生物学		英会話B	
		理科教育法Ⅲ				
		道德教育の指導法				
		特別活動及び総合的な学習の時間の指導法				
		生徒・進路指導論				
	後期	理科教育法Ⅱ	応用微生物学			
		理科教育法Ⅳ	細胞生物学			
		発達と学習の心理学	有機化学実験			
		教育課程論	植物バイオ実験			
3年次	前期	教育実習事前指導Ⅰ	生物有機化学			
		特別支援教育	応用微生物学実験			
		教育相談	分子生物学実験			
			栄養科学実験			
	後期	教育実習事前指導Ⅱ				
4年次	前期	教育実習A				
		教育実習B				
	後期	教職実践演習(中・高)				

様式第 7 号ウ

<応用生命科学科> (認定課程: 高一種免・理科)

(1) 各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	理科の基礎科目を中心に科学的な考え方ができる理科教員としての基礎を養うとともに、作物栽培実習を通じて自然の大切さを伝えることのできる素養を培う。語学や人文・社会科学の学びから広い教養を身に付ける。
	後期	化学実験、生物学実験などの実習科目を通じて科学について学ぶための実験手法を身に付けるとともに、実験結果を議論し、発表するための方法を習得する。教職の基礎科目を通じて教員としての適性を確認する。
2 年次	前期	バイオサイエンスに関連する専門科目を通じて科学的な素養を幅広く養うとともに、現代科学での諸問題に対して深く考えることのできる教員の資質を身に付ける。理科教育法についての基礎知識や授業法を習得する。
	後期	引き続きバイオサイエンスに関連する専門科目や専門実験を通じて幅広い科学知識を身に付けるとともに、科学への関心を深めるための探求的な資質、能力を身に付ける。理科教員として必要とされる専門的な指導法や高等学校教員として必要となる生徒指導法を習得する。
3 年次	前期	バイオサイエンスに関連する専門実験を通じて高度な科学的問題について研究するための研究方法を身に付ける。さらに実験結果について議論し、発表するための技術を習得する。模擬授業の実践から確かな理科教育の高い指導力を身に付ける。自ら主体的に教材研究を行うとともに、それを活かした学習指導案を作成できる。
	後期	模擬授業を繰り返し行うことで高等学校理科教員として必要な指導法を確実に習得するとともに、教育実習に臨むための基盤を確立する。板書や発問、的確な話し方などの基本的な授業技術を身に付けるとともに、反応を見ながら授業行うことができる。
4 年次	前期	専攻研究室に所属し卒業研究テーマを決め、実験・調査を進める。教育実習を通じてこれまで学んだ知識や技術を確認するとともに、総合的な授業の組み立てができる能力を身に付ける。また、教育実習を通じて生徒との向き合い方や、教員の仕事についての理解を深め、自らの教員としての資質を再確認する。
	後期	引き続き専攻研究室において卒業研究に取り組み、実験・調査を進めるとともに研究発表を通じて理科の専門家としてどれだけの資質が身に付いたのかを確認する。4年間を通じて高校理科教員として必要な知識や指導法が身に付いたのかを確認する。これまで培った資質を実際の教育現場でどのように活かしていくのか、自己課題を設定し、将来にわたって追求する。

様式第7号ウ（教諭）

<応用生命科学科>（認定課程：高一種免・理科）

（2）具体的な履修カリキュラム

履修年次		具体的な科目名称				
		各教科の指導法に関する科目及び教育の基礎的理解に関する科目等	教科に関する専門的事項に関する科目	大学が独自に設定する科目	施行規則第66条の6に関する科目	その他教職課程に関連のある科目
年次	時期					
1年次	前期	教育原論	物理学		日本国憲法	人権の歴史と現代
		教職入門	化学		情報リテラシーⅠ	
			生物学		健康スポーツ理論	
			物理学実験		SLSⅠ	
			地球科学実験			
			地球科学			
	後期	教育制度論	生物学実験		情報リテラシーⅡ	生命倫理学
		教育の方法及び技術（ICT活用の理論と実践を含む）	化学実験		英会話A	
			有機化学			
			植物生理学			
2年次	前期	理科教育法Ⅰ	分子生物学		英会話B	
		特別活動及び総合的な学習の時間の指導法				
		生徒・進路指導論				
	後期	理科教育法Ⅱ	応用微生物学			
		発達と学習の心理学	細胞生物学			
		教育課程論	有機化学実験			
			植物バイオ実験			
3年次	前期	教育実習事前指導Ⅰ	生物有機化学			
		特別支援教育	応用微生物学実験			
		教育相談	分子生物学実験			
			栄養科学実験			
	後期	教育実習事前指導Ⅱ				
4年次	前期	教育実習A				
	後期	教職実践演習（中・高）				

様式第7号ウ

＜生物環境科学科＞（認定課程：中一種免・理科）

(1)各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	教養科目等の受講により、一般教養を身につける。また、教育の基礎的理解に関する科目を履修し、教員の使命や職務の理解に基づき、熱意をもって教職の学修に取り組もうとする。さらに、理科の基礎科目を中心に受講し、科学的な知識や技能について自ら課題を見つけ、自主的に課題に取り組むことができる。
	後期	引き続き、教養科目等の受講により一般教養を身につける。学校の組織や仕組みを知り、その中で協力して教育を行うという姿勢を持つ。教科に関して自分が学んだ内容について、授業として扱うことを前提に、教材研究として学修を深めることができる。併せて、「英会話」を履修し、様々な人との意見交換ができる素養を身につける。
2年次	前期	これまでに身につけた一般教養や科学的な思考、理科に関する基礎的な知識を活かし、生態系や環境に関する基礎を学習し、今後の専門への心構え・基礎能力を身につける。実験科目を通じて、幅広い科学的知識や実験技術を身に付けるとともに、科学への関心を深めるための探求的な資質、能力を身に付ける。「理科教育法」を履修し、教科書や簡単な実験等を介して、わかりやすく授業を組み立てる方法を修得する。
	後期	これまでに学習した一般教養や科学の基礎を土台に、水環境や土壌環境など身近な環境や生態系について知識を得て、自ら課題を見つけ考察しようとする。実験科目を通じて、幅広い知識と実験技術を身に付けるとともに、科学への関心を深めるための探求的な資質、能力を身に付ける。また、理科教育法や教育課程、子どもの発達について学び、理科教員として必要とされる専門的な指導法や教員としての素養を身につける。
3年次	前期	教科に関する専門的事項として「保全生態学」や「水環境科学実験」などを受講し、生物と環境に関する高度に専門的な内容について知識や技能を身につけ、生物多様性や環境問題について議論することができる。さらに、教育相談や特別支援教育に関する科目等を履修し、教育活動を進める上で必要な知識及び技能や教育の役割等についての理解を深める。また、自ら主体的に教材研究を行うとともに、それを活かした学習指導案を作成する能力を養う。
	後期	生物環境科学に関するこれまで得た専門知識を踏まえ、「里山学実習」や「景観生態学実習」などの実習科目で実践することで、専門的知識をさらに深め、技能を身につける。板書や発問、的確な話し方など基本的な授業技術を身に付けるとともに、反応を見ながら授業を行う能力を養う。模擬授業を繰り返し行うことで、理科教員として必要な指導法を確実に習得するとともに、教育実習に臨むための基盤を確立する。
4年次	前期	専攻研究室に所属し卒業研究テーマを決め、自ら、生物環境科学に関する実験・調査を進める。教育実習を行い、それまでに身につけた知識・技能を実地体験において確認し、実践的指導力を養う。具体的には、自ら課題を考え、論理的にその課題に取り組む能力、生徒に対して公平かつ受容的な態度で接し、豊かな人間的交流を行う能力、生徒の発達や心身の状況に応じて、抱える課題を理解し、適切な指導を行う能力を養う。
	後期	引き続き専攻研究室において卒業研究に取り組み、自ら得た実験・調査の結果をとりまとめ、人類や地球、生物が直面している課題に対して科学的な根拠を持って解決しようとする。また、研究発表を通じて理科の専門家としてどれだけの資質が身に付いたのかを確認する。教育実習を振り返り、また、教職実践演習の履修を通じて教員として必要な知識技能の修得を確認する。

様式第7号ウ（教諭）

＜生物環境科学科＞（認定課程：中一種免・理科）

(2) 具体的な履修カリキュラム

履修年次		具体的な科目名称				
		各教科の指導法に関する科目及び教育の基礎的理解に関する科目等	教科に関する専門的事項に関する科目	大学が独自に設定する科目	施行規則第66条の6に関する科目	その他教職課程に関連のある科目
年次	時期					
1年次	前期	教育原論	物理学		日本国憲法	人権の歴史と現代
		教職入門	化学		情報リテラシーⅠ	
			生物学		健康スポーツ理論	
			地球科学		SLSⅠ	
			生物学実験			
			環境生物学実験			
	後期	教育制度論	食品化学		情報リテラシーⅡ	生命倫理学
		教育の方法及び技術(ICT活用の理論と実践を含む)	基礎生態学		英会話A	
2年次	前期	道德教育の指導法	環境化学		英会話B	
		特別活動及び総合的な学習の時間の指導法	物理学実験			
		生徒・進路指導論	地球科学実験			
		理科教育法Ⅰ				
		理科教育法Ⅲ				
	後期	発達と学習の心理学	水環境科学			
		教育課程論	土壌環境学			
		理科教育法Ⅱ	生態学			
		理科教育法Ⅳ	化学実験			
			環境化学実験			
3年次	前期	教育実習事前指導Ⅰ	保全生態学			
		特別支援教育	生態学演習			
		教育相談	水環境科学実験			
	後期	教育実習事前指導Ⅱ	里山学実習			
			景観生態学			
			景観生態学実習			
4年次	前期	教育実習A				
		教育実習B				
	後期	教職実践演習(中・高)				

様式第7号ウ

＜生物環境科学科＞（認定課程：高一種免・理科）

(1) 各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	教養科目等の受講により、一般教養を身につける。また、教育の基礎的理解に関する科目を履修し、教員の使命や職務の理解に基づき、熱意をもって教職の学修に取り組もうとする。さらに、理科の基礎科目を中心に受講し、科学的な知識や技能について自ら課題を見つけ、自主的に課題に取り組むことができる。
	後期	引き続き、教養科目等の受講により一般教養を身につける。学校の組織や仕組みを知り、その中で協力して教育を行うという姿勢を持つ。教科に関して自分が学んだ内容について、授業として扱うことを前提に、教材研究として学修を深めることができる。併せて、「英会話」を履修し、様々な人との意見交換ができる素養を身につける。
2年次	前期	これまでに身につけた一般教養や科学的な思考、理科に関する基礎的な知識を活かし、生態系や環境に関する基礎を学習し、今後の専門への心構え・基礎能力を身につける。実験科目を通じて、幅広い科学的知識や実験技術を身に付けるとともに、科学への関心を深めるための探求的な資質、能力を身に付ける。「理科教育法」を履修し、教科書や簡単な実験等を介して、わかりやすく授業を組み立てる方法を修得する。
	後期	これまでに学習した一般教養や科学の基礎を土台に、水環境や土壌環境など身近な環境や生態系について知識を得て、自ら課題を見つけ考察しようとする。実験科目を通じて、幅広い知識と実験技術を身に付けるとともに、科学への関心を深めるための探求的な資質、能力を身に付ける。また、理科教育法や教育課程、子どもの発達について学び、理科教員として必要とされる専門的な指導法や教員としての素養を身につける。
3年次	前期	教科に関する専門的事項として「保全生態学」や「水環境科学実験」などを受講し、生物と環境に関する高度に専門的な内容について知識や技能を身につけ、生物多様性や環境問題について議論することができる。さらに、教育相談や特別支援教育に関する科目等を履修し、教育活動を進める上で必要な知識及び技能や教育の役割等についての理解を深める。また、自ら主体的に教材研究を行うとともに、それを活かした学習指導案を作成する能力を養う。
	後期	生物環境科学に関するこれまで得た専門知識を踏まえ、「里山学実習」や「景観生態学実習」などの実習科目で実践することで、専門的知識をさらに深め、技能を身につける。板書や発問、的確な話し方など基本的な授業技術を身に付けるとともに、反応を見ながら授業を行う能力を養う。模擬授業を繰り返し行うことで、理科教員として必要な指導法を確実に習得するとともに、教育実習に臨むための基盤を確立する。
4年次	前期	専攻研究室に所属し卒業研究テーマを決め、自ら、生物環境科学に関する実験・調査を進める。教育実習を行い、それまでに身につけた知識・技能を実地体験において確認し、実践的指導力を養う。具体的には、自ら課題を考え、論理的にその課題に取り組む能力、生徒に対して公平かつ受容的な態度で接し、豊かな人間的交流を行う能力、生徒の発達や心身の状況に応じて、抱える課題を理解し、適切な指導を行う能力を養う。
	後期	引き続き専攻研究室において卒業研究に取り組み、自ら得た実験・調査の結果をとりまとめ、人類や地球、生物が直面している課題に対して科学的な根拠を持って解決しようとする。また、研究発表を通じて理科の専門家としてどれだけの資質が身に付いたのかを確認する。教育実習を振り返り、また、教職実践演習の履修を通じて教員として必要な知識技能の修得を確認する。

様式第7号ウ（教諭）

＜生物環境科学科＞（認定課程：高一種免・理科）

(2) 具体的な履修カリキュラム

履修年次		具体的な科目名称				
		各教科の指導法に関する科目及び教育の基礎的理解に関する科目等	教科に関する専門的事項に関する科目	大学が独自に設定する科目	施行規則第66条の6に関する科目	その他教職課程に関連のある科目
年次	時期					
1年次	前期	教育原論	物理学		日本国憲法	人権の歴史と現代
		教職入門	化学		情報リテラシーⅠ	
			生物学		健康スポーツ理論	
			地球科学		SLSⅠ	
			生物学実験			
			環境生物学実験			
	後期	教育制度論	食品化学		情報リテラシーⅡ	生命倫理学
		教育の方法及び技術(ICT活用の理論と実践を含む)	基礎生態学		英会話A	
2年次	前期	特別活動及び総合的な学習の時間の指導法	環境化学		英会話B	
		生徒・進路指導論	物理学実験			
		理科教育法Ⅰ	地球科学実験			
	後期	発達と学習の心理学	水環境科学			
		教育課程論	土壌環境学			
		理科教育法Ⅱ	生態学			
			化学実験			
			環境化学実験			
3年次	前期	教育実習事前指導Ⅰ	保全生態学			
		特別支援教育	生態学演習			
		教育相談	水環境科学実験			
	後期	教育実習事前指導Ⅱ	里山学実習			
			景観生態学			
			景観生態学実習			
4年次	前期	教育実習A				
	後期	教職実践演習(中・高)				

様式第7号ウ

＜生物環境科学科＞（認定課程：高一種免・農業）

(1)各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	教養科目等の受講により、一般教養を身につける。また、教育の基礎的理解に関する科目を履修し、学校教育・子どもについての基礎を習得する。併せて、「情報リテラシーⅠ」、「日本国憲法」「人権の歴史と現代」等を履修し、情報を利活用するための基礎的能力及び人権意識を身につけ、さらに栽培実習を通して作物や環境と向き合い農業生産の基礎を理解する。
	後期	引き続き、教養科目等の受講により一般教養を身につけるとともに、教育の基礎的理解に関する科目を履修し、学校教育・子どもについての理解を深める。併せて、「英会話A」を履修し、様々な人との意見交換ができる素養を身につける。また、農業や林業をとりまく生物資源や生態、食品に関する基礎を理解する。
2年次	前期	教科に関する専門的事項として「作物学」「微生物学」「食品加工学」「環境化学」などを履修し農業生産、食品製造、環境に関する基礎を身につけ、今後の専門への心構え・基礎能力を身につける。また、「職業指導」を履修し、学校における進路指導の意義、職業指導の運営、技術・指導の方法を理解する。併せて、教科の指導法及び道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目を履修し、教科指導、道徳教育等学校における教育活動を進める上で必要な知識及び技能や、教職の意義、教育の役割等についての基礎を身につける。
	後期	教科に関する専門的事項として「土壌環境学」「水環境科学」「生態学」等の環境に関する専門科目に加え、「地域食農論」では農業や食品に関する経済・経営・流通等を学び、「京野菜栽培加工実習」では、作物栽培、農業機械操作、食品加工を経験し、今後の専門への心構え・基礎能力を身につける。また、教科の指導法及び道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導等に関する科目を履修し、教科指導等学校における教育活動を進める上で必要な知識及び技能や、教職の意義、教育の役割等についての理解を深める。
3年次	前期	教科に関する専門的事項として「園芸学」「里山学」「地域再生論」「バイオ環境事業見学実習」など、高度な専門科目を履修し、農業に加え、資源活用や地域振興、畜産に関する専門的知識・技能を身につける。さらに、教育相談や特別支援教育に関する科目等を履修し、教科指導等学校における教育活動を進める上で必要な知識及び技能や、教職の意義、教育の役割等についての理解を深める。また、自ら主体的に教材研究を行うとともに、それを活かした学習指導案を作成する能力を養う。
	後期	教科に関する専門的事項として、「遺伝育種学」や「景観生態学」など、高度な専門科目を履修し、植物バイオテクノロジーや景観と生態系との関係性等に関し、専門的知識・技能を身につける。さらに、板書や発問、的確な話し方など基本的な授業技術を身に付けるとともに、反応を見ながら授業を行う能力を養う。
4年次	前期	教育実習及び事前指導の実践演習を行い、それまでに身につけた知識・技能を実地体験において確認し、実践的指導力を養う。具体的には、自ら課題を考え、論理的にその課題に取り組む能力、生徒に対して公平かつ受容的な態度で接し、豊かな人間的交流を行う能力、生徒の発達や心身の状況に応じて、抱える課題を理解し、適切な指導を行う能力を養う。
	後期	教育実習を行った者について事後指導を行い、また、教職実践演習の履修を通じて教員として必要な知識技能の修得を確認する。

様式第7号ウ（教諭）

＜生物環境科学科＞（認定課程：高一種免・農業）

(2) 具体的な履修カリキュラム

履修年次		具体的な科目名称				
		各教科の指導法に関する科目及び教育の基礎的理解に関する科目等	教科に関する専門的事項に関する科目	大学が独自に設定する科目	施行規則第66条の6に関する科目	その他教職課程に関連のある科目
年次	時期					
1年次	前期	教育原論	作物栽培実習		日本国憲法	人権の歴史と現代
		教職入門			情報リテラシー I	
					健康スポーツ理論	
					SLS I	
	後期	教育制度論	生物資源学		情報リテラシー II	生命倫理学
		教育の方法及び技術 (ICT 活用の理論と実践を含む)	食品化学		英会話A	
2年次	前期		基礎生態学			
		特別活動及び総合的な学習の時間の指導法	微生物学		英会話B	
		生徒・進路指導論	環境化学			
		農業科教育法 I	樹木学実習			
			作物学			
			食品加工学			
	後期		職業指導 I			
		発達と学習の心理学	土壌環境学			
		教育課程論	水環境科学			
		農業科教育法 II	京野菜栽培加工実習			
			地域食農論			
			生態学			
3年次	前期		職業指導 II			
		教育実習事前指導 I	バイオ環境事業見学実習			
		特別支援教育	保全生態学			
		教育相談	里山学			
			園芸学			
	後期		地域再生論			
		教育実習事前指導 II	景観生態学			
			遺伝育種学			
4年次	前期	教育実習A				
	後期	教職実践演習(中・高)				